

川崎医療短期大学のあゆみと教育上の特色

守 田 哲 朗

History of Kawasaki College of Allied Health Professions and its Educational Characteristics

Tetsuro MORITA

キーワード：医療短大のあゆみ，教育上の特色，附属病院での実践的実習，教養教育，プレースメントテスト

概 要

川崎医療短期大学は、徳・体・知の三カ条の建学の理念を教育の基本に据え、その実現に最大限の努力を行っている。各学科のカリキュラムは、講義偏重でなく、実習や演習に力を入れている。特に医科大学附属病院を十分に活用した長期間の実践的実習は、本学の誇るべき特色の一つである。併せて、教養教育充実のための医療福祉教養講座と保健医療福祉概論の導入や全ての教科の基礎ともなる日本語プレースメントテストの実施なども本学教育の特色として根付いている。

はじめに

川崎医療短期大学は、今から37年前の昭和48年(1973年)4月の開学以来、「人をつくる、体をつくる、深い専門的知識・技能を身につける」の建学の理念を教育の基本に据え、全学一体となって、時代の要請する実践重視の教育を行ってきた。「チーム医療」を担う実力があり、心豊かで幅広い教養を身につけた医療・福祉専門技術者の養成に全力を挙げ、大きな成果と高い評価を得ている。

さて、本学が昭和56年度から刊行している学術誌「川崎医療短期大学紀要」は、号を重ねて本年度で第30号となった。紀要編集委員会では、この節目の号を記念号とすることとし、「川崎医療短期大学のあゆみと教育上の特色」と題した寄稿を私に依頼された。私は、本学が開学した年である昭和48年に川崎医科大学に赴任し、それから川崎医療福祉大学、川崎医療短期大学へと続く37年もの長い間、川崎学園にお世話になった。たくさんの思い出を頂いたが、その中から医療短期大学時代に経験した教育上の特色について概要を紹介する。

医療短期大学のあゆみ

川崎医療短期大学は、川崎祐宣先生が設立された学校法人川崎学園における医科大学、同附属高等学校に次ぐ三番目の施設として昭和48年4月開学した。川崎先生は、本学の開学に先立つこと3年、昭和45年4月に先ず医の原点に立ち返った医学教育を確立するため医科大学を開設、人間性豊かな、優れた医師の育成を始められた。次いで、先生は、完全なチーム医療の実をあげるためには医師のパートナーとなる有能な各種専門技術者が必要であるとし、その教育は少なくとも短大レベルでなければならないと考えられ、本学を開学されたのである¹⁾。

本学のあゆみを一括して表に示した。開学時は、第一看護科と第二看護科、臨床検査科の三学科だけであったが、その後、放射線技術科、医療秘書科、栄養科、通信教育部医療秘書科、医用電子技術科(後に臨床工学科と改名)、医用デザイン科、介護福祉科、医療保育科が次々と増設されて総合医療短期大学へと発展した。しかし、一方では栄養科や医療秘書科、医用デザイン科、臨床工学科などが平成4年に開学した四年制の医療福祉大学に移管されたり、通信教育部医療秘書科と第二看護科が廃止されたりして縮小し、現在は、看護科(第一看護科が改名)、臨床検査科、放射線技術科、介護福祉科、医療保育科の五学科で構成されている¹⁾。

(平成22年10月15日受理)

川崎医療短期大学 前学長

Ex-President, Kawasaki College of Allied Health Professions

本学の開学以来の卒業生は、12,000名を超え、全国各地で活躍し、各方面から高い評価を受けている。

建学の理念

私立大学には、創立に当ってそれぞれ独自の建学の精神というか、建学の理念が定められている。優れた医療・福祉専門技術者の養成を目指す本学の建学の理

表 川崎医療短期大学のあゆみ

昭和48年4月1日	川崎医療短期大学 開学 第一看護科（3年制・入学定員50人） 第二看護科（2年制・入学定員50人） 臨床検査科（3年制・入学定員50人） 収容定員400人 看護婦学校指定 臨床検査技師学校指定
昭和52年4月1日	放射線技術科（3年制・入学定員50人） 医療秘書科（2年制・入学定員100人）設置 5学科、収容定員750人 診療放射線技師学校指定
昭和58年4月1日	栄養科（3年制・入学定員50人）設置 6学科、収容定員900人 通信教育部（3年制・医療秘書科・入学定員150人・収容定員450人）開設 栄養士養成施設指定
昭和63年4月1日	医用電子技術科（3年制・入学定員50人）設置 7学科、収容定員1,050人 臨床工学技士学校指定
平成3年4月1日	栄養科募集停止（川崎医療福祉大学へ改組）
平成6年3月14日	栄養科廃止
平成6年4月1日	医用デザイン科（3年制・入学定員50人）設置 7学科、収容定員1,050人
平成11年4月1日	医用電子技術科を臨床工学科に学科名変更
平成12年4月1日	医療秘書科、医用デザイン科募集停止（川崎医療福祉大学へ改組） 通信教育部（医療秘書科）募集停止 第一看護科入学定員を80人に増員 5学科、収容定員890人
平成13年4月1日	介護福祉科（2年制、入学定員100人）設置 6学科、収容定員990人 介護福祉士養成学校指定
平成13年10月30日	医療秘書科廃止
平成15年1月31日	医用デザイン科廃止
平成17年4月1日	医療保育科（3年制・入学定員70人）設置 第二看護科募集停止 介護福祉科入学定員を80人に減員 保育士養成学校指定
平成17年11月30日	通信教育部（医療秘書科）廃止
平成18年3月31日	第二看護科廃止
平成18年4月1日	第一看護科入学定員を120人に増員 6学科 収容定員1,180人 教員免許課程の認定（医療保育科、幼稚園二種免許状）
平成19年4月1日	第一看護科を看護科に名称変更 臨床工学科募集停止（川崎医療福祉大学へ改組）
平成22年3月31日	臨床工学科廃止

念は、①人をつくる、②体をつくる、③深い専門的知識・技能を身につけるという徳・体・知の三カ条である。

優れた医療・福祉技術者は、何よりも温かい心と思いやり、豊かな人間性の持ち主でなければならない。これが「人をつくる」とされている理由である。「体をつくる」とされた訳は毎日の厳しい業務をこなすために技術者自らが健康でなければならないからである。よき医療・福祉技術者は、言うまでもなく、卓越した専門的知識と技能の修得者でなければならない。これが三番目の理由である。

教育上の特色

1. 学生のための教育

本学は、三カ条の建学の理念を教育の基本に据えて、その実現に最大限の努力をすると共に、教育の実践に当っては、学生のための教育を目標としている。「医療は患者のためにあり、教育は学生のためにある」とは、川崎祐宣先生のご信条であったし、また、私ども教職員の座右の銘である。本学に入学した学生一人ひとりが建学の理念を体得し、各学科所定の科目、単位を修得し、国家資格試験のある学科においては、その合格を期さなければならない。本学ではこのような教育こそが学生中心の教育、学生のための教育としているのである。教職員一丸となってこのような教育の実現に当たっているのが本学である。

2. 医療・福祉の優れた教育環境

各学科のカリキュラムは、講義偏重でなく、むしろ実習や演習、特に病院や施設での実習に力を入れるなど、他の大学が真似できない程の充実さを誇っている。

加えて、本学は、優れた教師陣、最新の教育施設・設備、広大で緑豊かな自然環境に恵まれ、快適な女子学生寮や近代的な体育館も整備されている。また、医科大学をはじめ、同附属病院、医療福祉大学、専門学校リハビリテーション学院、総合医療福祉施設「旭川荘」、岡山の川崎病院などとの間に強力な連携があり、互いに医療と福祉の教育環境を提供しあっている。

3. 医科大学附属病院での実践的実習

本学の教育上の今一つの特徴は、隣接した約1,200床を有し最先端の設備と技術を誇る医科大学附属病院を十分に活用した実習に力を入れていることである。附属病院は元来、医科大学の病院であるが、短期大学や医療福祉大学の各学科の学生も実習の場として使用している。そこでは、本学各学科を卒業した先輩の多く

の方々がチーム医療における主役としての自覚と誇りを持って頑張っており、後輩の実習学生を医療の現場で直接指導してくれている。このような病院施設を十分に活用し、しかも長期間の実習は、本学の誇るべき特色であって、他の大学には決して見られない。

本学の病院や施設での実習は、見学実習のような「お客さん実習」とは違うし、また、実習のための実習といった「おごなり実習」でもない。病院や施設などの準職員とでもいうべき立場で現場の実務に従事させてもらいながら、各部署の担当者から実地に即した指導を受ける、いわば「実践的実習」である。

4. 教養教育の重視と医療福祉教養講座の導入

短期大学には2年あるいは3年の短期間で看護師や臨床検査技師などの国家資格を取得出来るというメリットがある。また、短期大学で何らかの資格取得後、四年制大学3学年に編入学し、もう一つの資格を取得することも可能である。

本学と姉妹校である医療福祉大学への編入学については、特別の定員枠を設定されている訳ではないが、同一の学園に属している関係で受験者も多く、毎年10名を超える学生が合格し、編入学している。

ところが、この短期大学からの編入学だが、教養科目の修得単位数があまりにも少ないことが問題になっている。折角、編入学出来ても、3学年次は教養科目の単位修得に追われるため、二年間での卒業は難しいからである。そこで、本学では平成15年度から共通の空き時間となる5時限目に「総合科学入門」、「文章表現」、「医学英語」などの教養科目を特別に開講して修得単位数を増やしてあげることにした。

これは編入学希望の学生への対応に加えて、高等学校の文系コースからの入学生への物理・数学などの基礎学力補充と文章表現力の向上を狙ったものであるが、実はそれだけではない。医療職など、人を相手にする職種では心豊かな人間性が何よりも重要である。とかく専門技術を優先しがちな短期大学において、いかにして幅広い人間性を養っていくか、このためにも教養教育にもっと時間を充てなければならないと思う。

これに関して、本学では²⁾平成16年度より全学の学生を対象に学園内外から有識者を招いて「医療福祉教養講座」を開講している。本講座は、なかなかの好評で、会場は立錫の余地もない程であり、全学を横断する「特色のある教育」としてその成果が大いに期待されたが、平成21年度からは本講座を「医療福祉教養講座」と「保健医療福祉概論」の二つに分け、教養教育

の一層の充実を図っている。特に、後者では、建学の理念を明示し、その概念を説明すると共に、医療福祉に関係する教養的な内容を盛り込み、さらに時代に即した話題を随時取り入れ提供することにしており、しかも予てから念願であった全学科共通の必修科目とした。今後益々充実した科目となり、幅広い教養の涵養に役立つことを期待している。

5. 日本語プレースメントテストの実施

近年、大学全入時代に突入し、全国的に「基礎学力の低い学生、とりわけ全ての教科の基礎となる「日本語」の表現力や理解力に劣る学生が目立つようになってきた。このような学生にとっては、日本語力不足が専門教育はもとより国家試験、就職試験、編入学試験などに取り組む際にも大きなバリアとなる。そこで、本学では^{3,4)}入学直後の学生一人ひとりの日本語の学力を把握し、その結果を教育方法の改善に還元すべく、平成19年度から全新入生に対して国語について、20年度からはこれに加えて放射線技術科では数学についても「プレースメントテスト」を行い、共に効果的であったので、今後も継続することになっている。

6. 短期大学基準協会による点検・評価

昨今の大学改革の動きは、実に目まぐるしい程である。自己点検・評価もその一つで、学内での点検・評価だけでなく、他大学との相互評価や第三者による認証評価も受けなければならなくなった。

本学は、平成18年度に短期大学基準協会が実施した第三者評価を受けた。建学の精神をはじめ、教育や学生支援、研究、社会的活動、管理運営などの領域について報告書を作り、訪問調査を受けた。その結果、「本学がすべての領域にわたって評価基準を充たしているので適格である」という認定証を戴いた。なお、指摘された「向上・充実のための課題」については、着実に改善・充実を図っている。

7. 目的意識をもった学生が多い

以上のように、教育環境が素晴らしく、恵まれたものであっても、教育や学習の主役はそれを受ける学生である。学生のやる気と努力なしでは、教育効果を期待することは出来ない。この点、本学の学生の多くは、「将来は優秀な医療・福祉専門技術者になる」という目的意識を持って入学している。このために、入学後、進路変更を理由に退学する者は僅少である。また、国家資格試験のある学科では、最終学年での補習講義や模擬試験、担任や卒業研究担当教員による積極的な学習指導などが行われており、学生も学科の取り組みに

応じて懸命に努力し、全国上位の合格率を修めている。さらに、就職達成率は、長引く不況に関わらず、各学科ともほぼ百パーセントで、しかも、ほとんどが専門の知識・技術を活かした職種に就職している。学生や保護者への就職説明会、担任と就職担当教員による個別指導などに加えて、学生自身による積極的な就職先訪問が効を奏していると思う。なお、就職に関しては、知識・技術の習得はもちろん重要であるが、人格を磨き、人間関係を円滑に紡いでいく努力も怠ってはならない。

冬の時代に向けた積極的な学生確保を

わが国の大学、特に短期大学は、少子化の波を受け、冬の時代である。18歳人口の激減や大学受験の四年制志向、同種類の大学・学科の急激な増加などの影響を受けて、短期大学を取り巻く社会環境は極めて厳しい。

本学では、これまでに、入試説明会やオープンキャンパス、入試制度などを折々の様相に応じて改革したり、入学前学習や高校教科の補習教育、医療福祉教養講座などを次々と導入したりして、学生確保に努めてきた。

今後は、今一つ、本学の教育上の特色とその効果について、オープンキャンパスや入試説明会、高大連携、高校訪問、ホームページなどの機会を捉えてもっとPRし、本学への志願者確保に結びつける努力が必要であ

る。昨年度から手始めに内容を充実したオープンキャンパスの回数の増加と各学科教員による高校訪問の強化を重点的に行っている。このように、確かな目標のもとで、優秀な学生を確保し、質の高い医療・福祉専門技術者を育成する努力を続けるならば、本学の将来はまだ確かなものであるといえよう。

おわりに

川崎医療短期大学のあゆみと教育上の特色について概要を述べた。本学は、これまでに他学には見られない特色ある教育で以って、心豊かで幅広い教養を身につけた医療・福祉専門技術者の養成に努め、大きな成果を挙げてきた。今後も、教職員一丸となった努力を続けられ、本学が益々発展することを祈念して結びとしたい。

文 献

- 1) 川端 清，加藤章三：川崎学園＝医療・福祉の総合学園を目指して＝，岡山，学校法人川崎学園，2010。
- 2) 川崎医療短期大学：(4)医療福祉教養講座，平成18・19年度自己点検・評価報告書，68—73，2008。
- 3) 橋本美香，山口恒夫，下田健治，大高正憲：「日本語プレースメントテスト」の実施結果，川崎医療短期大学紀要28：19—25，2008。
- 4) 橋本美香，山口恒夫，兵藤文則：川崎医療短期大学における「日本語プレースメントテスト」の実施結果（第2報），川崎医療短期大学紀要29：1—5，2009。